

ヒトラー・ファシズムと闘った人びと(1)

二人のマリア

——反ファシズム抵抗運動に捧げた生涯——

中 村 浩 平

まえがきにかえて

激動の20世紀が過ぎようとしている。いろいろな出来事、事件、そして戦争に多く彩られた世紀であった。20世紀を象徴する言葉はいくつもあると思われるが、「戦争」という言葉は疑いなくこの世紀を表すキーワードの一つと言えるであろう。国家間の戦争、多数の国家を巻き込んだ大規模な戦争（世界大戦）、国家内の民族対立に基づく小規模な戦争（民族紛争）がこの世紀を通して間断なく起こっていた。そしてさらに世紀末のいま国家間ではない、国内における内戦や民族紛争、テロなどの小さな紛争が止むことなく、世界の各地で勃発し、21世紀へとなだれ込んでいく様相を呈している。人類はこのような民族間の争い、地域間の争い、異なった宗教間の争い、つまり一言でいえば大小問わずの「戦争」を、テロをも含めて、21世紀の近い将来にはたして克服できるのであろうか。あるいは次の世紀に於いても依然として止むことなく続くのであろうか。

ところでドイツは、20世紀前半に一方の当事者として二つの世界大戦に大きく関わった。二つとも悲惨な結果を周辺諸国の人々、とりわけ占領地域の人々、そしてドイツの人々にももたらしたが、とりわけヒトラー政権下にあったときに行った第二次世界大戦はいろいろな意味でこれまでの戦

争には見られない問題を含み、規模の大きさもさることながら、未曾有のものであった。この戦争中に、ドイツの国内およびドイツ周辺の支配地域でナチスが密かに遂行した計画的大量殺人、すなわちアウシュヴィッツという言葉に象徴される事態、いわゆるホロコーストは、半世紀以上を経た今日でも未だに軋みながら、われわれ人類の上に覆い被さっている。そして、この一つの民族をこの地上から抹殺してしまおうとする試みは、何の罪もない非戦闘員を無差別に殺戮したヒロシマ、ナガサキへの原爆投下と同様に、人類が決して忘れてはならないことであり、単にナチスの蛮行であることを越えて、われわれ人類が次の世紀へ絶対に持ち込んではいないのである。

アウシュヴィッツ、ヒロシマと、今世紀の戦争がもたらした惨事は人間を無差別に、しかもある点では極めて効果的かつ合理的に人間を殺すという、いわばかつて例を見ない戦争の工場化といった現象を現出させた。人間に幸せをもたらす筈の科学が、そう信じて人類は科学信仰にのめり込んでいったのだが、われわれにもたらしたものの一つがほかならぬ戦争であった。今日の科学文明の辿り着いた究極の姿の一つが戦争の形態をとってわれわれ人類を脅かしていると言ってよいであろう。近代兵器のとどまるころを知らない研究開発とその成果は、いかに効果的に殺人を完遂するかが究極目標であるだけにグロテスクだが、アウシュヴィッツとヒロシマは、換言すれば、今や姿を変えて、さらに鋭く鮮明な形を取って湾岸戦争のイラクや民族紛争のコソボに現れていると言えよう。

ヒロシマに原爆を投下したエノラ・ゲイ号のほんの数名の乗組員だけが自分たちのした行為の結果として原爆のキノコ雲を上空から見たのだが、その原爆雲の下でいかなる惨事が展開しているかは想像できなかつたに違いない。それからほぼ半世紀、イラクやコソボの上空で、パイロットは計器にしたがって、目標を狙ってミサイル発射のボタンを押す。一分の狂い

もなく目標を捕らえ、破壊する任務を全うするためにである。ここには、ヒロシマから基本的には何一つ変わってはいない姿が見られる。そこには想像力の展開する余地は全くない。それはまるで自動車工場では組立工がネジ一つおろそかにせず、しかも時間内に正確にこなす作業と同じである。そして戦争に直接関わっていない地域のひとびとは、工場見学よりはるかにリラックスして、コカ・コーラを飲みながら、テレビで攻撃目標がミサイルによって瞬時に破壊されるのを観客として見ている。これが現代の、いわば一つの到達点にたった科学の成果としての戦争の姿である。

アウシュヴィッツではガス室の殺人から焼却炉での死体焼却までの一連の作業は、むしろ手作業によるよりプリミティブな形で行われていた。しかし基本的に事態は変わってはいなかったと言えよう。そこでは殺人工場として、いささか効率は悪いが死体焼却作業を計画通りに、淡々と、無感動に、無関心に進めていく。一つの死体の背景には様々な人間の個人としての歴史がある筈だが、ここではそのようなものは全く問題とされない。むしろおびただしい死体を前にして、ひとの想像力そのものを閉め出し、拒絶する現実がそこにはあったのである。

いま20世紀を終えるとき、われわれは今までの生き方を変えなければ未来はないという瀬戸際にきていると言える。これまでである意味で人類は好き勝手放題をしてきたが、その付けとしていま地球上至る所で環境破壊、環境汚染に直面している。そして、もし何の強力な手も打たないままにこの事態が進むと、もはや地球は保たない状況に追い込まれている。そしてこれは人類だけの問題ではない。地球はいわば本来的に人類を含めて動物、植物といった他の存在との共同体である。それ故、われわれはいまこの視点をもって他の存在を含めた自然との共存を図り、共生を押し進めるべきであろう。

今世紀を特徴づけてきた「戦争」はこれ以上まさるものはない人為によ

る一大破壊行為であり、すべての地球共同体の構成員の生存にとって最大の利敵行為である。「戦争」はまた最大の無益な浪費行為であり、環境破壊、環境汚染を一段と押し進めて憚らない。われわれは地球・環境保護という新しい概念を手に入れたが、これからはこれこそ「戦争」に取り替わって次の世紀のキーワードとなるべきであろう。そのためにもわれわれは、今までわれわれが歩んできた過去を振り返り、その意味を問い、自分のものとしてしっかりと捉え、それを未来に繋いで行く必要がある。

ファシズム体制は本来的に自己の体制保持・発展のために、暴力によって人々を支配し、抑圧するという特性を持っているが、さらにはその手段として最大の暴力である戦争を発動した。ドイツでもヒトラーが政権を掌握し、ドイツ国民を戦争に駆り立てるべく国内の引き締めをし始め、反対者をテロ行為で脅迫し、さらに矯正収容所に精神改造と称してぶち込むなど一連の乱暴狼藉を働いているとき、国家総動員法のもとに全国民・全国家組織が戦争遂行のために戦争準備体制に組み込まれ、駆り出されたとき、しかしこのような状況の中でも、この全体主義的國家総動員体制に反対し、抵抗し、挑み、闘った人びとがいた。彼らは決して多くはなかったが、巨大なヒトラー・ファシズム体制に対して怯むことはなかった。しかしながら強大なヒトラー・ファシズム体制は微塵も揺るがず、彼らはほぼ制圧され、沈黙を強いられた。彼らは保守主義者、共産主義者、社会民主主義者、キリスト者であったが、彼らの闘いの火はしかし残り火となって、灰の下で決して消えることなく、息を潜めて、機会の到来を待っていた。そして、やがてヒトラー・体制崩壊とともに残り火は種火となって、新しい時代の原動力となったのである。

ヒトラー・ファシズム体制に対して闘った人びとの中には、闘いを放棄した人、闘いを裏切った人、闘いで倒れた人、闘いを生き抜いた人などさまざまいるが、ここでは反ファシズム抵抗運動の真の意味で中核を担った

人びとに焦点を当ててその人たちの軌跡を追い求めてみたい。

I. マリア・ライトナー

1. マリア・ライトナーとは誰か¹⁾

クララ・ツェトキンの、軍国主義に対して闘い、革命の遺産を護り、民主主義を根付かせるために“すべての所であらゆる武器をとって敵と戦う準備をしよう”と言う「若き前衛隊」紙上（1919年6月7日）でのプロレタリア女性への呼掛けに応じて、多くの優れた女性達が行動を開始した。彼女達は共産主義者であり、あるいは社会民主主義者であったが、熱烈なプロレタリア的心情をもつ国際主義者でもあった。彼女達は深い内的確信から革命家として反ファシズム運動家としてその道を歩んだのであり、その多くはすでに若い頃から国際労働運動の中で帝国主義、植民地主義、ファシズムそして戦争に反対して闘っていた。彼女達は全ての人々がその出自あるいは人種に依って差別を受けない社会的平等と正義を求めて、諸民族の為に平和を求めて闘った。彼女達はこの政治的課題を一生涯まさに人生を賭けて追い求めたのであるが、彼女たちの生きた激動する時代もまたそのことを彼女たちに要求したのである。ある者は取り巻く時代の激流の中に姿を没し、ある者は逆巻く時代の波を乗り越えて勝利の日を迎えたのであった。

この様に高く理想を掲げその実現の為に一身を捧げた女性たちの中に、今日では殆ど忘れ去られてしまっている反ファシズム作家マリア・ライトナーがいた。

1938年7月26日に亡命者としてニューヨークに到着したオスカー・マリア・グラーフは8月9日に「American Guild for German Cultural Freedom」²⁾の創設者フベルトゥス・フリードリヒ・プリンツ・ツォーレー

ヴェンシュタインに手紙を送り、“さほど有名な作家ではありませんが、非常に積極的な反ファシズム作家が居ります。・・彼女は良質の作家であり、極めて勇気のある人で、かつ控え目な女性でもあります。・・”³⁾と書き、マリア・ライトナーの支援を要請している。

またアンナ・ゼーガースもほぼ同じ頃の8月20日に同団体に手紙をだし、すでに既知の間柄であるかつての同僚について、“才能豊かな作家で、優れた勇敢な報道作家”であると書き、更に“彼女はきわめて逼迫した状態の中で生活しています。彼女の物質的に劣悪な状況と仕事の質を考えますと、緊急の援助がぜひ必要でしょう。”⁴⁾と続けて、マリア・ライトナーへの資金援助を必ずするよう求めている。

グラフとゼーガースがその文学的才能を評価し、その人柄を惜しんでなんとか困窮の中から救いだそうとしたこの小柄で華奢で真面目な女性は、この頃すでに亡命生活が5年以上にも及び、三度目の亡命地フランスが活動拠点であった。しかしこの間一貫して反ファシズムの非合法活動に従事していたため、世人の視野からは完全に消え去っていた。

マリア・ライトナーの非合法の反ファシズム活動に就いては断片的な情報しか残っていないが、彼女はしばしばドイツ本国に潜入し、貴重な情報をもたらしたし、またザール地方に度々潜伏し地下抵抗運動をしていたらしいことが判っている。国際主義的連帯の下に彼女は危険な仕事を勇敢に遂行した。だがやがてフランスもドイツに降伏し、他のすべての亡命者同様活動拠点を失うことになり、彼女の運命も次第に袋小路に追い込まれて行くのである。

2. 生い立ち

マリア・ライトナーはオーストリア＝ハンガリー帝国のヴァラジュディン（現在のクロアチア）で1892年1月19日に建設業を営む家庭に3人姉弟

の第1子として生まれた。様々な民族の血が入り混じったドイツ語を話すユダヤ系の一家であった。従って彼女は子供の頃から家庭的背景として広く世界の中へ飛び出して行く素地をすでに持っていたとも言えよう。しかし同時に彼女の将来には良き市民階層の子女としての進むべき道も示されていた。弟が2人おり、マキシミアンとヨハンといった。この弟達から将来の生き方に就いて大きな影響をうけることになる。⁵⁾

末弟ヨハンが誕生して程ない1896年に、一家はブダペストへ移住した。この移住はマリア・ライトナーに大都市のもつ世界に広く開かれた教育を受ける機会を与えた。⁶⁾彼女はここで1902年から1910年までハンガリー王国国立ブダペスト高等女学校へ通学した。当時ハンガリーでは女性の大学入学はまだ不可能であったので、彼女はジャーナリストになるべく条件を整えるためスイスに学び⁷⁾、1913年から、地元の大衆新聞「夕刊」社で記者としての人生航路を歩み始めている。その頃、彼女を取り巻く時代はまさに大変動を予感させ波乱含みの様相を呈していた。

第1次世界大戦が勃発すると、彼女は外国特派員として、特にストックホルムからブダペストの各紙へ記事を送った。戦争の結果はハンガリーにおいても急速な反軍国主義的運動を呼び起こし、急進的で、革命的志向をもつ知的な若者の大部分はここに糾合した。2人の弟は、ブダペストで「ガリレオ・サークル」という名称の偽装していたグループのメンバーとしてこの運動に積極的に参加していて、マリア・ライトナーは徐々に弟たちの革命的な考え方に影響されて、連帯するようになった。彼女は急速に政治的に目覚めた極めて活動的なジャーナリストに変わっていった。当時の「ブダペスト新報」に彼女は“興味深い、自立した女性”⁸⁾として書かれているという。

3. ベルリン滞在

マリア・ライトナーの生涯と創作活動は弟たちの生き方と密接に結びついている様に思われる。弟たちと同様 коммуニストとなった彼女は、ハンガリー・ソヴェト共和国崩壊後ホルティの白色テロの暴威から逃れて、先ずウィーンへ、さらにベルリンへと行った。当初ベルリンでは、生活資金もあまりなく、また無名のまま過ごさなければならなかったが、弟ヨハンと職業上あるいは政治的課題を共に遂行する中で一層結びつきを深めていった。彼女は以前にもまして活発に共産主義運動に没頭したが、この時期にジャック・ロンドンの「鉄の踵」のハンガリー語訳を雑誌「新たな前進」に記載し、また自ら編集し、注釈し、結語を書いた「チベットの乙女たち」と云う翻訳集をベルリンのアクセル・ユンカー出版社からだしている。

1925年にメディア・コンツェルンのウルシュタイン出版社は、読者に絶えず新しい読み物を提供するために、世界各国へ有能な報道作家を派遣し、いわゆる内幕物をルポさせる企画を立てた。才能豊かな若い、亡命者のマリア・ライトナーが、仕事上の発展と生計を安定させるために、この機会を利用したのは当然の成行きであった。こうしてウルシュタイン社は、若くて才能があり、冒険心に富んだ女性を発掘し、直ちに彼女を、彼の地での就職状況を詳しく調査するという困難な課題を与えて、アメリカへ派遣したのである。以後1928年まで約3年間北米、中米、南米に滞在し、そこでのさまざまな体験報告をこのベルリンの大出版社の各月刊誌や日刊紙に載せている。彼女は旅行者として旅をしたのではなく、またそのためには資金も十分ではなかったので、各滞在先で様々な社会で下働きの仕事をしながら、アメリカ大陸を隈なく歩いた。そして80箇所以上にも及ぶ場所での体験は、貧しい人々や搾取されている人々の視点から20年代のアメリカ社会の在り様を捉え、社会的弱者の労働条件や生活条件についての真正

な物的基礎的資料を得たのであった。⁹⁾その際、マリア・ライトナーは絶えず婦人問題に特別な注意を払っていて、それらはやがて、「夕べの世界」、「労働者画報」、「婦人の道」と云った左翼系の新聞に現れる様になる。彼女は、実際に自分の目で見たこと、あるいは少なくとも徹底的に調べたことだけを記述した。それ故彼女の手法は雑誌の要求するものと合致していたと言えよう。

彼女のアメリカ報告は、ブルジョア及びプロレタリアの双方の読者層に幅広く好感をもって受け入れられた。¹⁰⁾その広く確信に裏づけられた叙述は新鮮で、明快で、簡明直截的であった。対話、質問、第三者による記述や報告は記録的性格を強めてはいるが、同時に彼女の文学的才能をも証明している。ルポルタージュの傾向はいわば常に階級闘争的なものであった。ウルシュタインの報道作家ではあったが、彼女は決して自分の立場を隠したりはしなかった。彼女の発表した記事への肯定的な共感が増大するが、それはとくに、個人的体験を手がかりとして社会状況や政治的背景を描写しようとする彼女の決して日常に埋没しない社会批判的な見方に依るところが大きい。この傾向は以後の亡命中のルポルタージュ作品の場合により強まって行く。こうして彼女の体験は後に小説「ホテル アメリカ」と「女一人世界を行く」に結実したのである。これらの著作に対する反響は大きくかつ持続し、その評判はドイツ国外にまで及んだ。とりわけ「女一人世界を行く」は彼女の最も個人的な、最も成功を収めた本であり、ポーランド語、ロシア語、ハンガリー語に翻訳された。

しかし、彼女は外国の出来事だけをみていただけではなかった。ドイツ国内の事件の発展、事柄の推移を大きな気遣いで見守っていた。「夕べの世界」紙に記載された社会批判的なルポルタージュ・シリーズ「時代の嵐の中の女たち」の中で、彼女は、この時代に生きる8人のベルリン女性生活をしっかりと記録している。そしてこの終章でマリア・ライトナー

は、彼女が描写した非人間的状態を根本的に変革する真に唯一のチャンスは団結した労働者階級の意識的な政治闘争である、と捉えている。この連載中ヒトラーが帝国宰相となり、共産党および社民党系の新聞は発行禁止となった。¹¹⁾

その頃のマリア・ライトナーについて、ドイツ・プロレタリア革命作家同盟の秘書トゥルーデ・リヒターは、“私はマリア・ライトナーとは良く知っている間柄で、彼女を非常に評価しています。…この同情心に篤い賢い同志、彼女の小説「ホテル アメリカ」は当時多くの喝采を浴びていました。ヒトラーの政権獲得後彼女は短期間、探索をかわすため、私の所に居りました。”¹²⁾と述べている。しかし彼女を成功に導いた本が、今や彼女を追いつめることになった。1933年5月10日の焚書事件はナチスによる人類の精神的文化遺産の破壊という未曾有の蛮行であるが、さらに5月16日には“有害で望ましくない出版物の一覧表”を発表して、そこに記載の書物の一掃を図った。いわゆるブラック・リストで“除去処分”の対象となった文学者及び文学作品（事項）は135を数え、その中に、外国人としてはヘミング・ウェイ、ハシェク、徳永（直）等と並んで、マリア・ライトナーはその作品「ホテル アメリカ」と共に挙げられている。このリストが公開された後、もはや彼女はドイツで生きて行けるチャンスはなかった。ナチによるテロと殺人が全ドイツで荒れ狂い、彼女もまた大きな危険の中に居たのである。こうしてマリア・ライトナーはドイツを去り、プラハへ行った。彼女はそこでの支援と活動の可能性を、かつて滞在したウィーンとのつながりで、望んでいたようである。しかしその意図は充されず、失望の内に、他の多くのドイツやハンガリーの仲間達と同様、新しい活動の可能性を求めてパリへと赴いたのである。

4. パリでの活動

パリはアムステルダム、プラハとならんで外国に於ける反ファシズム抵抗闘争の中心の一つであった。そこでは統一戦線政策が生きていた。亡命のもたらす困窮や不安、ヒトラー・ドイツに残っている友人や親戚への気掛かり、非人間的なファシスト政権に対する抵抗の意志などが新たな人間関係をつくりだした。この地でマリア・ライトナーは同僚や同志の多くと再会した。この頃彼女と再会したエーリヒ・ヴァイネルトと彼の妻リーは彼女に休暇を取るように誘ったが、リーはその時のことをこう書いている。“マリア・ライトナーは1934年に、夏だったと想いますが、2週間程フォルバハの私どもの家に滞在して居りました…。彼女の話ですと、パリではフランス人の家庭でお手伝いとして働いていたそうです…。ちっぽけな部屋に住み、毎夜蝋燭の灯の下で書き続けたとのこと…。私たちを訪ねた後の彼女の消息は全く聞いておりません…。ただ、マリア・ライトナーがしばしばドイツへ行き、非合法活動をしているのは、承知していました。”¹³⁾いわゆるザール闘争がすでに始まっていて、彼女は秘かにそこを活動の場としていたらしい。

その頃、ゲシュタポの追求から逃れて「赤い救援」の事務所で働いていたローレ・ヴォルフは、“マリアとは1934年秋にザールブリュケンで知り合いました。個人的な接触は一切ありませんでした。彼女とは「赤い救援」の事務所でよく会いました。そこには作家のハンス・マルヒヴィツァ、ブルーノ・ザーロモンらが時々来ました。・・マリアは控え目な人で、とても内気でした。”¹⁴⁾と想起している。

フランス亡命中マリア・ライトナーはドイツ作家防衛同盟の一員と成った。パリにいたドイツ・プロレタリア革命作家同盟のおよそ25名のメンバーも統合された。毎月曜日の夜サン・ジェルマン通りのカフェ・メフィストではドイツ亡命作家防衛同盟の会合が開かれていた。彼女はたまには

参加していたらしい。そこでは“作家の夕べ”という催しも行われていた。その一つでマリア・ライトナーは自分の作品「女一人世界を行く」を朗読している（1937年4月5日）。これが非合法活動に従事した彼女のフランス亡命中公になっている唯一の記録である。ルポルタージュ文学の大先達エーゴン・エルヴィン・キシュと、彼女のキシュとの類似性を考えると、この頃接触し、意見交換をしている可能性が極めて強いと思われる。事実、キシュは当時精力的に活動しているので、その機会は多かったと考えられる。しかもベルリン時代には会っていた。しかし残念ながら彼の記録にはマリア・ライトナーの名前は何か見られない。¹⁵⁾

彼女の目だたない容姿と行動は、1935年以降繰り返し「ライオンの洞窟」と呼ばれるファシズム・ドイツの中心部へ危険極まりない、偵察旅行を企てるのには確かに大きな利点であった。これらの旅行から得た成果はやがて「言葉」誌、「パリ日刊」紙、「新世界舞台」誌に現れたが、いずれも現場での徹底的な調査に基づくものである。¹⁶⁾彼女がそれらを誰かの委託を受けて行ったのか、或は抵抗組織と連携して行ったのか、そのさい誰が支援したのかなどは、未だに不明である。¹⁷⁾このように詳細に報告出来るのは、¹⁸⁾彼女が信頼できる情報源をナチス国家の中に持っていたからだと思われるが、何れにせよいくつかの推測は成立ちうるが、確定出来るものは今日まだない。

ともあれ、彼女の報道を通してのみファシズム・ドイツの情勢に関する主要な事実が外国に伝達されたのである。彼女が死の危険を賭けて調査し公開した「第三帝国に於ける村の学校」、「世襲農地の3人の農夫の肖像画」、「ラインスドルフ（火薬工場）」、「イー・ゲー・ファルベン」等は第三帝国の真の事態を暴露したので、ゲシュタポの目には反逆罪を構成するものとして映った。後日ナチスの絶滅収容所で大量殺人に用いられるツィクロンBを製造していたイー・ゲー・ファルベンの記述の中で、彼女は“この惑

星の生命はマイン河の水中と同様に絶えるのであろうか”と、恐るべき未来像を予告している。

また、ヒトラー・ドイツの若い娘が体験する運命を文学的に描いた「エリーザベト、あるヒトラーの少女」¹⁹⁾は、ジャーナリズム的探求と文学的造形がほど良く統合された、いわば MARIA・ライトナー独自の文体で書かれている代表作で²⁰⁾、その上、今日でもこのナチス時代の日常生活の記録としても価値があると言えよう。この小説は、反ファシズム闘争を彼女が敢えて全人格を賭けて行ったことを証明している。ここでは決まり文句の背後に隠されたファシズムの非人間的な本質が鋭く暴き出されている。

5. 終 局

1940年4月に、MARIA・ライトナーは経済的理由でサン・スルピス街4番地のホテルからセーヌ街75番地へ居場所を変えた。屋根裏部屋で暖房もなく、流感をこじらせ、健康状態は一層悪化していた。そうした中でも彼女はオーストリアに就いての小説、亡命者の生涯に就いてのドラマ、幾つかの英語の短編をすでに書き上げ、さらにアメリカでの体験を盛り込んだ作品に取り掛かっていた。そしてそれらの幾つかをアメリカで出版しようとして航空便で送った。しかしその直後の5月に、多くの亡命者と同様にドゥ・ギュール収容所に拘留され、その際、他の残る原稿は紛失したり、押収されてしまった。彼女はだが見張りのいない時に他の人たちと収容所を脱出することに成功し、あらゆる交通手段を使ってフランスをあちこち廻りながらトゥルーズに到達した。そこから7月6日付け²¹⁾でアメリカへ手紙を出している。その中で彼女は、逃亡中体験した沢山の途方もなく面白いことを、もし命が長らえられるなら、文学の材料として使ってみたいこと、状況は今や抜き差しならぬ程実に厳しいこと、今度逮捕されると深刻な結果を招くこと、盗にあい手元には最低限度の必要品も無いこと、

今では援助はアメリカだけが当に出来ることなどを書いている。彼女は反ファシズムに関する寄稿やフランスでの戦争体験の本を、物質的安定の為にも、考慮していたが、もはや状況は創作活動を許さなかった。状況は今や正に厳しかったのである。

8月12日には改めて援助を求め、“... 私の現況は悪いのです。私は危険な状態にあり、まったく資金もなく、健康状態も最悪です。荷物もなくなりました。どうか電信で幾らかお送りください。さもないと私には方策がないのです...”²²⁾そしてアメリカへの入国ヴィザの取得が窮めて困難なので、かつて国際平和会議²³⁾の際に2年間パリで秘書として仕えたシオドア・ドライサーに連絡してくれるよう頼んでいる。彼女は“... 私の今の状況がどんなに困難で危険なものであるかを知れば、おそらく、シオドア・ドライサーは私のために何か手を打ってくれるでしょう...”²⁴⁾と記している。ドライサーはかつて彼女に彼の負担でアメリカへ彼を訪問するよう提案していたが、実現出来ずにいた。

さらに10月28日には²⁵⁾、35ドルの送金に感謝をし、健康状態が極めて悪いこと、もう長くは持ちこたえられないこと、訪問ヴィザの取得を一日千秋の思いで待っていることなどを書き送っている。そして恐らく彼女の最後のものと思われる手紙が1941年3月4日にマルセイユから出されている²⁶⁾。そこでは、返事の無いこと、どれほど待たねばならないかということ、空腹と不安が極限であると、どうみても状況が窮まったこと、この命をどう持ちこたえられるか、と書きさらに、いつも迷惑を掛けたことを詫び、好意を受けたこと全てに感謝して、手紙を終えている。

アメリカでは彼女を救済すべく尽力したが、救援は遅すぎた。ルイーゼ・クラウスハールは1940年夏トゥルーズの喫茶店でマリア・ライトナーが一人途方に暮れたように座っているのを18-9年振りに見ている。そしてその時声を掛けなかったことをのちに後悔している。また、アレクサン

ダー・アープシュが非合法滞在をしているマリア・ライトナーにマルセイユで会ったのは、アンナ・ゼガースが旅立った後の1941年夏であった。²⁷⁾しかし、恐らくこれを最後として、彼女の姿は我々の前から消えた。彼女が生きそして闘ってきた激動の時代の大きな波のうねりの中に吸い込まれてしまったのである。

マリア・ライトナーの最期は未だ確認されていない。諸説があるが、²⁸⁾何れも信頼性に乏しい。確たる証拠はないが、しかし何れにせよ死亡したことは確実である。他の多くのドイツの作家たちと同様、ファシズムと闘い、その野蛮な犠牲となったのである。アンナ・ゼガースは1965年のワイマルでの国際作家会議の演説の中でそのことに触れて何人かの作家の名前を挙げているが、その中に Marchwitza, Bredel, Petersen, Lorbeer と並んで Leitner の名が挙げられている。²⁹⁾もし、アメリカ亡命に成功し、あの時代の荒波を乗り越えて生きながらえることが出来たならば、彼女自身強く望んでいたように、自ら得た数々の希有な体験を多くの読者に伝える事が出来たであろう。それは恐らくファシズムと言う人間の蛮行を徹底的に摘出し白日のもとにさらけ出したことであろう。それらはきっとわれわれ後世の人間にとって貴重な記録となり、忘れがたい教訓となり、かけがえない遺産となったことであろう。そうおもうと、彼女が業半ばにして去ったことは、極めて大きな損失であったと言えよう。

II. マリア・グロルムス

1. マリア・グロルムスとは誰か³⁰⁾

反ファシズム活動家で殉教者でもあるマリア・グロルムスは彼女の故郷上ラウジッツ以外では一般には今日でもほとんど知られていない。1959年にかつてのラーヴェンスブリュック強制収容所跡に記念碑が建立されたと

き、この収容所で謀殺された著名な女性の中に彼女の写真があった。この記念碑除幕式には世界中の23カ国から代表団および招待客が参加し、このことによって彼女の名前がその活動とともに広く世の中に知られるようになった。

マリア・グロルムスは1896年4月24日にライプツィヒで生まれ、父ヨハネス・グロルムス博士は当地のカトリック系高等小学校の校長であった。ツェツィーリアという2歳年下の妹がいた。母は長い間肺結核を患い、姉妹が15歳と13歳の時に亡くなった。その母が病氣療養のため、大都会の汚い空気を逃れて移り住んだのが、ラウジッツのラディボール村であった。マリア・グロルムスは、妹とともに、休暇や週末にこの地に母を訪ね逗留した。そしてこの地が長じて、彼女の活動の舞台となった。

自分が生まれ育った町ライプツィヒが書籍の町であることから、彼女は将来は大学で学び、大卒の資格を持った司書になりたいとの希望を持っていた。しかし父は図書館での仕事は健康を損ねると考え、別の道を選ぶように勧め、そして躰とフランス語習得を目的に、ベルギーのリエージュにあるカトリックの全寮制女学校に娘を入れた。そこで彼女はフランス語の他に、フラマンの友人たちと話すために、禁止されていた言葉「フラマン語」を密かに学び、と同時に、彼女は当時のドイツにおけるゾルブ人の運命との類似を見たのである。このとき以来彼女は、不正がとくに及んでいる弱い人々の立場に立とうとするようになる。そしてこの彼女に強く際だった正義感は生涯彼女を駆り立てることになった。そしてここに彼女の原点があるという良いであろう。

帰国後彼女は、大学入学の前提条件でもあったので、ライプツィヒのガウディヒ師範学校に入り、卒業後ライプツィヒのロイデニッツにあるカトリック系高等小学校の教員となった。この頃彼女は、本に対する興味は最早なく、公的生活を送り、人間社会を学び、現在の対立する社会関係を研

究し、とりわけ歴史を根本から理解したいと願っていた。そのため彼女は大学で主専攻として歴史と社会学を選んだのである。

1920年から1925年まで彼女はライプツィヒとベルリンで学んだが、すでにライプツィヒで彼女は社会主義学生グループの団体に入っていた。1924年には彼女は社会主義学生同盟の一員として、ジュネーブの諸国民の連帯のための大学連合の教育週間に派遣されている。活発な政治活動にも拘わらず、彼女は学問への関心を失うことなく、1925年には上級教諭の国家試験に合格し、アウグスティヌ女子修道会経営のオフエンブルク師範学校に職を得た。ここは母の故郷でもあり、生徒たちともよく馴染み、同僚も引き留めたのだが、政治への義務感と関心を禁じ得ず、フランクフルト・アム・マインで、左派の中心人物で、かつての帝国宰相で内相のヨゼフ・ヴィルト博士の周囲に集まっている労働共同体に誘われて入った。ここで彼女は、女性たちを公的生活の中で意識的な協働に加わるよう呼びかける特別な任務を当てられた。彼女はとりわけ、女性には政治的教育が不可能であり、女性が政治と関わるのは女らしくないという見方と戦った。1925年から1929年まで彼女はカトリック者として、民主主義者として、ヨゼフ・ヴィルトのサークルの中で、「敵は右派だ」というスローガンのもと、軍国主義および反動勢力とたたかっていた。しかし、ファシズムの危険が大きくなっているのに、労働運動は団結せず、進歩的ブルジョア民主勢力は孤立したままであった。彼女は、暴力を持って権力に迫るヒトラー一味を阻止するには、強力な共同体、あらゆる民主勢力が団結しなければならず、とくにキリスト系労働者のセンターが必要と考えた。しかしファシズムを立ち止まさせるはずの民主勢力と反ファシズム勢力との統一は、世界観や社会的判断の違いから挫折した。そしてそのようなことからこのグループを離れ、彼女はフランクフルトからベルリンへ移ったのである。そしてこの間に「ヨゼフ・フォン・ゲレスと民主制」という論文で哲学博

士号をライプツィヒ大学から授与されている。

このようにマリア・グロルムスは早い時期から迫り来るファシズムの危険を認識し、全国民による反ファシズム戦線を目指して努力していた。そして幸いなことに、働く人々のすべての陣営の中に、分裂した、政治的および世界観的見解を乗り越えて、共同の抵抗戦線を形成しようとする勇気のある人々がいたのである。彼女はとくに若い知識人のグループと、プロテスタントとカトリックの若い聖職者の間に支持を得たのである。

彼女はドイツの優れた市民派ジャーナリストの一人であり、その政治活動によって20年代末および30年代初めには反ファシズム運動家として有名になっていたので、ヒトラーが政権を掌握した1933年1月30日以降は直接ナチスの迫害に脅かされる身となった。それ故政治ジャーナリストとしての活動を止めざるを得なくなった。スイスにいる近い親戚の所へ逃げ込めば、喜んで亡命を引き受けて貰えたのだが、しかし彼女は自ら選んだ任務に忠実でありたいと、ドイツに留まった。そして彼女はドイツ国内での非合法活動に参加し、とくにザクセンの反ファシズム抵抗運動家たちとチェコスロヴァキアにいるドイツ亡命者たちとの間の伝令役を務めた。そして同時に、1934年に逮捕されるまで、政治、教会、知識階級の著名な人物との多面的なコネを利用して、故郷で政治犯の家族を援助し、裁判では被告人たちの弁護に努めた。その間ファシズムに迫害された多くの人びとを密かに国境を越えて連れ出す非合法活動をし、多くの反ファシズム運動家の生命を救ったのである。

2. 故郷ラウジッツ

1933年彼女はベルリンから故郷ラディボール村へ引っ込んだが、村やその周辺では彼女が政治ジャーナリストであることを知っている者は殆どいなかった。そのため直接的にはナチスの脅威を感じずにはなかった。ラ

ディボールはいまでは彼女の隠れ場所となり、ベルリンは活動の場所となった。彼女の任務は、まず、解散させられた中央のメンバーと連絡を取ることであった。当時ドイツの多くの地方でカトリック青年と一緒に共産党や社民党の青年が共同の活動をしていた。カトリック青年同盟は「聖ゲオルク」と「ローラントの手紙」というタイトルで反ナチ教科資料を会員のために発行していた。

上ラウジッツの中心地バウツェンは、チェコに近いこともあって、ナチスによって迫害された多くの人たちが支援を求めて集まっていた。その上ここにはドイツ有数の刑務所があり、多くの反ナチスの政治犯がここに送られ、収容されていた。そして彼らを巡る人々や家族たちもこの地に集まっていた。当然ナチスも密偵を放っていた。

マリア・グロルムスは、妹と子供の頃からこの辺一帯の山野を駆けめぐり、誰も知らないような森の中の小径も知っていた。彼女たちはしばしば国境を越えてズデーテン地方にまで足を踏み入れたこともあった。このように、彼女はこの地方一帯の地理に特に通じていたので、ここで多くの人を助けた。

加えて、彼女の父はバウツェンのカトリック系師範学校の教員として20年間働き、ゾルブ文化協会の役員、ゾルブ学術協会の会員として活動し、退職後1924年に死亡するまでラディボールに住んでいたため、ラウジッツでは名士であり、そのお陰で彼女はバウツェンとその周辺の父の知り合いの大勢の有力者たちと知り合い、有利な状況下で非合法活動ができていた。

しかし彼女の活動は日増しに困難になっていった。迫害された者を救うこと、拉致された者たちの痕跡を探し出すこと、逮捕された者たちの脅かされている家族を迫害者の目の届かないところへ連れ出すこと、絶望している者たちを勇気付けること、逃亡者に情報を与えること、ばらばらになった迫害されている者たちの家族を団結させること、国境を越えて向こう

側へ密かに送り出すこと、こういった非常に危険な、生命を賭けるような仕事を引き受け、これら全てを一年中を通して、昼夜を問わず、行っていた。³¹⁾しかも、勝手に知った地元とはいえ、ゲシュタポや密偵がうようよしている、人々の恐怖の的として恐れられているパウツェン刑務所の領域内で絶えず行っていたのである。

非合法活動家として彼女はしばしば独りぼっちであり、自分の仲間から離れ、時には身内の者からも離れて、行動しなければならなかった。非合法活動の至上命令は言うまでもなく絶対に秘密を口外しないことである。そのためにも彼女は一人で行動したのである。

彼女は自分に課せられたこれらの任務をラディボールの家やベルリーンで、さらに、多くの迫害された者たちが最後の瞬間に越えることができたドイツ・チェコ国境での、ナチス突撃隊や警察によって監視された路上で、プラハのドイツ亡命者たちの間で、ドイツとオーストリアの社民党員たちが互いに接触を求めているチェコ・オーストリアの国境で果たした。

1933年10月彼女はヘルマン・ラインムートと一緒にチェコスロヴァキアへ行き、ボーデンバッハで反ファシズム統一戦線の有名な先駆者マックス・ゾイデヴィツとドイツ国内の労働運動の状況を論じ、1934年春に2回目の会合を持つ取り決めをした。³²⁾このために労働組合内部の意見に関する正確な情報が収集されることになった。彼女はこの目的のために1933年12月にベルリーンでマックス・ウーリッヒと、1934年2月に、ドイツ金属労働者同盟の役員としてザクセンのさまざまな都市の非合法グループを指導していたリヒャルト・タイヒクレーバーと、そして最終的には4月に、1933年以前に社民党のザクセン州議会議員であったクリスティアン・フェルケルと会わなければならなかった。

これらで得た情報は、彼女とラインムートが1934年5月に今度はプラハで会ったときに、十分に評価された。そして定期刊行物「ローテ・ブレ

ター」の編集が取り決められた。³³⁾ハンブルクで後日ヴィリ・エルスナーが、「経済政策と社会主義教育のための革命的社会主義者の機関誌」というサブタイトルのついたこの雑誌の第1号をタイプに打ち込んだ。エルスナーはドイツ共産党と密接な関係があるのみならず、ドイツとイギリスのクエーカー教徒と関係を保っていた。

1934年後半のマリア・グロルムスの政治活動に関しては、9月に再度チェコでゾイデヴィツに会い、引き続きウィーンでオットー・パウワーと会談したことが知られている。彼女のこの最後の旅行の直接的成果は、「ローテ・プレター」誌に「同志O・Bとのはなしあい」、「新しい革命的態度」という二つの論文で公表されている。またこの間の彼女の活動についてマックス・ゾイデヴィツは、彼女が何一ついやな顔をせず、際限なく他人のために働いたとして真に評価している。³⁴⁾

3. 逮捕そして拘禁

このようにして一年が無事に過ぎたが、彼女の支援した者の一人がゲシュタポに逮捕されるという不運が起きた。数え切れないほどの非人間的な惨たらしい拷問を加えられ、病気になり、高熱にうなされ意識が朦朧とした状態の中でこの男性はマリア・グロルムスの名前を口にした。そしてその翌朝にはもうすでに恐るべき黒塗りのリムジンが、すでに一年近く探索し発見できずにいた反ファシズム抵抗運動家を逮捕すべく、グロルムスの家から僅か百歩ばかり離れたラディボール村の村長の家の前に止まった。隣家のツイーシュ夫人はこれに気付き、すぐに知らせようとしたが遅かった。グロルムスは来客中で、外の出来事には全く気がつかなかった。こうして彼女は逮捕されたのである。11月7日のことであった。居合わせた来客はパウル・ニェク夫妻であった。³⁵⁾ゲシュタポは徹底的に家宅捜索をしたが、容疑を裏付ける物件は何一つ、紙切れ一枚も発見できなかった。彼

女はメモ用紙もメモ帳も用いなかった。彼女は全ての秘密事項を記憶の中に保つように訓練していた。そのため、名前、住所、日付、約束時間、場所、それにもっと小さなことまで何一つ失われるものはなかった。それ故、ゲシュタポが秘密を聞き出そうとして、いつも、時には深夜にまでもおよんで彼女に加えられた拷問は想像を絶するものがあつたと思われるが、彼女はそれに耐えた。そしてついに一言も漏らさなかつたのである。彼女が何の前触れもなく突然逮捕されたとき、恐らく仲間の誰かがグロルムスをゲシュタポに売つたと考え、パウツェンとその周辺の非合法活動家たちの間にパニックが起きた。しかし彼らには累が及ばなかつた。彼女はまさしく「非合法活動の至上命令は口が堅いこと」という鉄則を守つたのである。

彼女と同時に、行政官補でラインラントのオーバーハウゼン郡長代理ヘルマン・ラインムート博士とハンブルクの社会福祉家ヴィリ・エルスナーが逮捕され、裁判にかけられた。未決勾留は一年にも及んだが、ゲシュタポはさしたる手がかりを掴むことはできなかつた。三人に対する告訴は、あらゆる手段を用いてヒトラーを排除すること、すなわち「国家反逆準備」罪であつた。これは、ナチス国家に於いては最も重大な告訴の一つであり、死刑で処罰されるものであつた。

ベルリーンの「民族裁判所」でマリア・グロルムスは幸運に恵まれた。国選弁護人のフェンドリッヒ博士はきちんとした人であり、裁判長のシャート博士は、証人が被告に対してとくに不利な証言をして裁判所に好意的な態度を示そうとすると、叱責した。彼女が終始勇気を持ってその主張を述べたことは裁判官全員に好印象を与えたようであつた。「私はヒトラーに反対し、ファシズムに反対します。私はまた、私に利用できるあらゆる手段を用いてファシズムに反対する活動をしてきました。違法な手段も用いました。しかし暴力的手段を用いてヒトラーの排除を準備したことはありません。と言いますのは私はテロリズムに反対する人間だからです。」³⁶⁾

幾多の勇気のある発言によって彼女は多様な尊敬を勝ちえた。かくして検察官が最終論告で10年の求刑を求めたのに対して、「国家反逆」罪で禁固7年の判決が下された。³⁷⁾そして彼女はヴァルトハイム刑務所に収監されたのである。

そこでの5年という歳月は、もしも有意義に過ごせれば、短いと言えるかも知れないが、彼女にとっては耐え難い長さであった。³⁸⁾マリア・グロルムスは非合法活動をしていたとき、人目のつかぬ路上や見知らぬ駅で一睡もせず多くの夜を過ごしたことがあった。しかしそのような夜でも、その後には必ず朝が来た。しかし今や彼女は世界からまったく隔離されていた。人々からも隔離されていた。人類を困窮から救おうとして闘っているまさにその人たちが、捕らえられ、苦しめられ、死んでいかなければならないと言うことが、彼女を苦しめた。何もできないことが最大の心の苦痛であった。精神は働いても、このような囚われの生活の抑圧された状況では病んでしまう。そこで彼女は心身ともに健康であろうとした。人生のあらゆる素晴らしいことを思い出したり、宗教、芸術、学問のことを考えたりして、³⁹⁾何とか身を持ちこたえて厳しい二冬を過ごしたとき、助けが外からやって来た。彼女は周辺の村での仕事が許可されたのである。⁴⁰⁾そして再び人々の中に入り、世界をみ、空気と太陽を味わい、彼女の身体は有益な仕事ができ震えた。人を助けることが出来たのである。しかし依然として彼女の苦痛は残ったままであった。なぜなら、ヒトラー・ファシズムは依然として存在していて、その非人間的な帝国は以前にも増して強力になっているように見えたからである。

マリア・グロルムスが1940年に刑期を終えたとき、ヒトラーはまさに権力の頂点にいた。ヨーロッパ大陸がほとんど彼の帝国に属さんばかりであった。このような状況で個々の人間はどのようにヒトラーに、ヒトラー・ファシズムに抵抗することが可能であろうか。

ヴァルトハイム刑務所からドレスデンの警察本部に連れてこられ、ゲシュタポから「ヒトラー帝国」のために働くなら「自由」を与えると提案された。⁴¹⁾ゲシュタポは、彼女が裁判中反ファシズムの態度を隠さず、しかも屈服しなかったので、釈放され自由になると、再び反ファシズム抵抗運動を続けると思っていた。そこで、それを阻止するためにも、彼女を取り込もうとしたのである。このとき彼女は、一方では抵抗運動の続行と強制収容所、他方では「総統と帝国」のために働くことと「自由」という、二つの可能性のあいだで選択を迫られていたのである。そして彼女は、先行き何ら希望の見えない時代に、強制収容所行きを選んだのであった。

4. ラーヴェンスブリュック強制収容所⁴²⁾

こうして1941年1月初めにマリア・グロルムスは囚人列車に乗せられドレスデンを後にした。行き先はラーヴェンスブリュック強制収容所であった。彼女はすでに6年に亘る囚人生活を送っていたので、収容所に着いたとき弱っていた。しかし彼女の抵抗の意志はそれにも拘わらず不屈で、新しい未来について自分の中に抱いていた像はいささかも曇ってはいなかった。一体この強靱な精神力はどこから来るのだろうか。彼女はある時ポーランド女性フェリーチャ・バナクに、「ベットの下に横になってミツケーヴィッチを読んだことが、強制収容所の地獄の中で最も幸せな日々の一つであった」⁴³⁾と打ち明けている。文学教師のフェリーチャ・バナクは「マリアがポーランド文学の作品を求めていた」のを知っていたので、アダム・ミツケーヴィッチの詩集を彼女に与えたのであった。⁴⁴⁾

彼女の場合は疑いなく、その文学体験が抵抗の意志と力を強めたのである。そしてさらに未来への確信はまた、ゲシュタポによる「自由」をはねつける力を彼女に与えていた。そしてこの力が収容所での地獄の苦しみを越えて、彼女の鍛えられた政治的予見は、まだ不確かではあるが、全ての

人間にとって健康で明るい生活の場が築かれる筈の未来を遙かに捉えるのである。後のオーストリア国民議会議員ローザ・ヨッホマンはこう書いている。「彼女は食べ物や着物にはまったく興味がありませんでした。彼女は頭の中の世界で生きていたからです。そしてそれはそれで良かったのです... その様子をありのままに表現できるかどうか、私には分かりません。そこには最も恐ろしい地獄の雰囲気があったからです。そこを私たちは通ったのです。それを私は残念ながら描写できないのです... 私たちはひもじさ、寒さ、絶望を忘れました。マリアが私たちを別の世界へ導いてくれたのです... マリアのような人間が収容所にいたことが、一人一人すべてにとって良かったのです。」⁴⁵⁾彼女たちはさまざまな路線の政治犯であった。社民党員、共産党員、君主制支持者、キリスト教社会主義者、エホバの証人等々.....。しかしそのことについて問う者は誰一人いなかった。そこでは主義、信条を越えて人間だけが重要だったのである。

マリア・グロルムスはしかし強制収容所内でもなお活動の場を見出すのである。⁴⁶⁾彼女はドイツ、ソ連、ポーランド、チェコの囚人仲間のあいだに啓蒙的な影響を与えた。なかでも、最も不運な人たち、最も抵抗する術のない人たち、大抵は看守の気紛れ、憎しみ、サディズム的行為の犠牲となった人たちの間でとくに活動したが、ポーランドの人たちに対しては、同じスラブ民族という親近感からことのほか関心と愛情を向け、政治的に教育しようとした。殴打、罵り、食事抜きは日常茶飯であり、一寸したミスで鞭が唸った。ポーランド女性イレナ・シドロウスカは、そうした中でも親衛隊女性看守たちでさえ、マリアの静かな落ち着きにはある種の敬意を払い、彼女の精神的卓越さを嫌々ながらも認めざるを得なかった、と述べている。そして、「マリアは偉大なラウジッツの愛国者で、スラブ民族の友人であったにもかかわらず堅い信念を持った国際主義者であった... 彼女は、私が無神論者で唯物論哲学を信奉していることをよく知っていた

が、それは私たちの友情にいささかの影も投げかけませんでした。すべてをマリアは理解していました。』⁴⁷⁾と続け、さらに、ゲーテやハイネの民族がかくも法外に品位を落とすことが出来るのか、そしてヒトラーに支配されてしまうようなことがどうして起こるのか、と言う考えが彼女を苦しめた、と書いている。彼女は人生に於いてドイツ人の最も身近にいて、彼らの中で働いてきた。ドイツ文化を高く評価し、ドイツの文学や音楽や学問を愛してきた。それだけに、彼女にはヒトラー・ファシズム体制は理解を超えることであった。

しかしヒトラー暗殺（未遂）事件の直後、フェリーチャ・パナクは新聞を手にもマリア・グロルムスの所へ走った。そしてその時の様子を、「彼女は新聞の見出しを食い入るように見て、ドイツ民族が自ら本当に、ヒトラー・ファシズム政権の恐ろしい縛りを勇気を持って爆破しようとしたことが信じられないようでした」⁴⁸⁾と書いている。その時マリア・グロルムスは未来に一縷の希望の光を見ることが出来たのかも知れない。

5. 最 期

マリア・グロルムスは逮捕されてから10年、厳しい空腹と伝染病チフスに耐えてきたが、残念ながら、解放前の最後の月々を持ちこたえることが出来なかった。非人間的な労働条件と生活環境の中で、1944年夏彼女は突然倒れた。彼女が全人格を賭けてその打倒のために闘ったヒトラー・ファシズム体制の崩壊9ヶ月前であった。最期の様子をドレーズデン出身のエリーザベト・リンハルト夫人は次のように書いている。「私たちは、花が萎れるように、彼女が6週間で去って行くのを看取らねばなりませんでした。8月5日土曜日に妹から手紙が来ました... 1944年8月6日午後3時、彼女はこの手紙を力のない手にしっかりと握って、やがて故郷を見、二度とそこを立ち去ることはないと言うあつい願いを持って、亡くなりま

した。』⁴⁹⁾

この、シュナのカタリナとローザ・ルクセンブルクを精神的支えとした女性は、生来明朗闊達で、信仰に篤かったと言われているが、非合法活動の厳しい試練と刑務所や強制収容所での地獄をみるような体験を経て、鋼鉄のように強い意志を持った人間になった。しかし彼女はキリスト者として模範的な人生を送り、いつも慈しみを持って人々に接し、主義、思想、信条を越えて仲間と連帯し、あらゆる過酷な状況の中でその支えとなった。自然の小さなものへの優しい愛と、すべての人びとのための人権闘争への強い意志は終始その死に至るまで彼女を貫いていた。

後のザクセン州首相マックス・ゾイデヴィツは感動的な言葉で彼女のことを想起している。「マリア・グロルムスのような素朴で、質素で、控えめな人間はごく希にしか存在しませんでした。彼女は、わたしの人生の数多い経験の中でも、ファシズムに対する戦いの中で最良で、最も勇気のある、最も勇敢な闘士の一人でした。』⁵⁰⁾

マリア・グロルムスの希求した新しい共同体、抑圧のない、迫害のない、搾取のない、戦争のない、人間が互いに尊重され合う平和な社会を求めている戦い、そのために彼女は命を落としたのだが、その不屈の戦いをわれわれは忘れるべきではないであろう。

お わ り に

いま、いわば「戦争の世紀」とも言える20世紀を振り返ってみて、人間がなした最大の愚行としての戦争を捉えるとき、ナチスの起こした戦争は規模の大きさからいい、またその過程で現出したユダヤ人抹殺を含むことなどから、史上希にみるものであり、きわめて突出したものであったと言うことができよう。その象徴がアウシュヴィッツであるが、半世紀も経つ

とその存在そのものさえ忘れさせようとする力が働いてきて、アウシュヴィッツは無かったとか、あってもそれほどのものではなかったとか、あるいはスターリンのやったことと比較して大したことはなかったとか、いわば一種の歴史の否定現象、相対化現象が起きている。⁵¹⁾だからわれわれはいま、歴史からアウシュヴィッツを抹殺しようとする動き、すなわち記憶の破壊行為とたたかわなければならぬ。いうまでもなく、アウシュヴィッツは歴史の一部などではなく、歴史の全部なのである。その意味でアウシュヴィッツの後はナイのである。この認識からわれわれは出発しなければならないのである。

このようにまさにアウシュヴィッツが現実起きていた時代に、マリア・ライトナーとマリア・グロルムスは出自も、背景も、生活・思想信条もそれぞれ異なっているが、共産主義者として、キリスト者として、あるいは一人の人間として、ファシズムと闘うという信念を持って同時代を生きたのである。

ファシズムという悪夢と闘い一人は失踪し、一人は強制収容所で命を終えた。二人はドイツの西南と東南地域と言うように空間的には遠く隔たった場所で活動したので、交わることはなかったが、同じ時期に、ファシズム体制を倒すことによってこの世界に新しい社会を創り出そうと言う共通の願いを持ちながら闘い続け、ヒトラー・ファシズム体制の崩壊を見届けることなく、その犠牲となり、あつと言うまもなく時代を通り過ぎていった。自ら闘いの成果を見ることはなかったが、しかし彼女たちの戦いは無駄に終わることはなかった。仲間がその意志を継ぎ、戦いは絶え間なく続行され、ついにファシズム体制は打倒されたからである。

それゆえ、彼女たちの命を懸けてのファシズムとの闘い、すなわちその反ファシズム抵抗運動での活動を歴史の忘却の中から取りだし、記憶に留め、決して忘れまいとすることは意義のあることであろう。いわば記憶の

風化とたたかう作業がいま求められている。われわれはそうすることによって、彼女たちがヒトラー・ファシズムと闘った意味と、そのことからさらに戦争の持つ無意味さをくみ取り、戦争のない世界の到来を願いながら、それらを次の時代へ伝えることが出来るようにしなければならないであろう。

注

1. Ernst Loewy: Literarische und politische Texte aus dem deutschen Exil 1933-1945. Stuttgart 1979, S. 1257. この本の中で Loewy はマリア・ライトナーを取り上げている。このことがライトナーを歴史の中への埋没から救い出したと言えるであろう。文学史で取り上げているのは僅か Geschichte der deutschen Literatur. Von den Anfängen bis zur Gegenwart. 10. Band. Von 1919 bis 1945. Berlin 1973, S. 303, 319. のみである。さらに資料として次の3点がある。

1) Lexikon sozialistischer deutscher Literatur. Von den Anfängen bis 1945. Monographisch-biographische Darstellungen. Halle 1963, S. 320f. 2) Christoph M. Hein: Der "Bund proletarisch-revolutionärer Schriftsteller Deutschlands". Biographie eines kulturpolitischen Experiments in der Weimarer Republik. Hamburg 1990, S. 300. 3) Deutsche Intellektuelle im Exil. Ihre Akademie und die American Guild for German Cultural Freedom. Eine Ausstellung des Deutschen Exilarchivs 1933-1945 der Deutschen Bibliothek, Frankfurt am Main. München 1933, S. 503-511.

また、Renate Wall: verbrannt, verboten, vergessen. Kleines Lexikon deutschsprachiger Schriftstellerinnen 1933-1945. Köln 1988, S. 117-118. のなかでも同時代に活躍した他の女性たちと共に取り上げられている。

他に、Helga Schwarz: Maria Leitner—eine Verschollene des Exils? Exilforschung. Band 5. München 1987, S. 127-133. と同著者の: Internationalistinnen. Sechs Lebensbilder. Berlin 1989, S. 77-109. があり、なお、本稿では後者から多くの示唆をえた。

2. 亡命ドイツ人の救援機関で、とくに学者、作家、芸術家、音楽家等に就職紹介や

- 財政援助を行った。注1の資料3)参照。
3. Brief von Oskar Maria Graf an Hubertus Prinz zu Löwenstein, Generalsekretär der "American Guild for German Cultural Freedom" vom 9. 8. 1938, in: Deutsche Intellektuelle im Exil, S. 504.
 4. Brief von Anna Seghers an die "American Guild for German Cultural Freedom" vom 20. 8. 1938, in: a. a. O., S. 504.
 5. 彼女の全体像を把握するためには、兄弟との関係について詳しい論究が必要とされるが、ここでは今後の課題としてひとまず立ち入らない。
 6. 当時のブダペストの知的文化的環境は彼女に多大な影響を及ぼしたと思われる。例えば、ジョン・ルカーチ：ブダペストの世紀末。(早稲田みか訳) 白水社 1991年。175頁参照。
 7. 唯一の可能性はスイス留学であった。ローザ・ルクセンブルクもチューリヒで学んでいる。
 8. Helga Schwarz: Internationalistinnen, S. 79.
 9. Renate Wall: Verbrannt, verboten, vergessen. Kleines Lexikon deutschsprachiger Schriftstellerinnen 1933 bis 1945. Köln 1988, S. 117-118.
 10. Maria Leitner: Elisabeth, ein Hitlermädchen. Erzählende Prosa, Reportage und Berichte. Hrsg. u. Nachw. v. Helga Schwarz. Berlin und Weimar 1985, S. 474.
 11. a. a. O., S. 479.
 12. Trude Richter: Die Plakette—Vom großen und vom kleinen Werden. Halle 1972, S. 218. なお同一の記述が: Totgesagt. Erinnerungen. Halle-Leipzig 1990, S. 233. にある。また Helga Schwarz: Maria Leitner—eine Verschollene des Exils? Exilforschung Band 5. München 1987, S. 125. 参照。
 13. H. Schwarz: Internationalistinnen, S. 101.
 14. a. a. O., S. 102. Vgl. Lore Wolf: Ein Leben ist viel zuwenig. 2. Auflage. Berlin 1973, S. 52-53.
 15. これは全く奇妙なことだが、筆者が調べた限りでは、彼女の名前は見当たらない。ひょっとして、彼女の非合法活動と関連しているのかも知れない。しかし、漏れは当然有り得ることなので、さらに調べて完全を期したい。
 16. Guy Stern: Exil-Jugendbücher als Politikum, in: "Wider den Faschismus.

- Exilliteratur als Geschichte. Hrsg. von Sigrid Bauschinger und Susan L. Cocalis." Tübingen und Basel 1993, S. 41.
- 17.今のところ資料から裏付けられるのは「American Guild for German Cultural Freedom」からの資金援助のみである。
 18. H. Schwarz: Internationalistinnen, S. 97-98.
 19. 本の体裁をとって出版されたのは1985年である。注10参照。なお彼女は、「ドイツ国内への非合法の旅行と、これまで本の形で出版出来なかったヒトラー・ユーゲントに関する小説によって、私は資金が完全に無一文となりました」と、「American Guild for German Cultural Freedom」へ書き送っている。Deutsche Intellektuellen im Exil, S. 507. 参照。
 20. H. Schwarz: Nachwort, in: Elisabeth, ein Hitlermädchen, S. 483.
 21. Deutsche Intellektuelle im Exil, S. 507f. なお、以下の記述はここに収録されている彼女の「American Guild for German Cultural Freedom」宛の手紙に基づく。
 22. a. a. O., S. 509.
 23. H. Schwarzに直接聞いたところによると、Die Internationale Friedenskonzferenz aus Anlaß des SpanienkriegesのさいMaria LeitnerはTheodore Dreiserの一時的な秘書を務めたとのことであるが、同時期ほかにもDreiserが関与したものとして、1) Die Konferenz der Internationalen Schriftstellervereinigung zur Verteidigung der Kultur in Paris (25. 7. 1938), 2) Dritter Internationaler Schriftstellerkongreß zur Verteidigung der Kultur in Paris (28. 7. 1938) などがあるので、むしろ彼女は、彼のバリ滞在中ずっと秘書の役割を果たしていたのではないかと推察される。
 24. Helga Schwarz: Maria Leitner—eine Verschollene des Exils?, S. 132-133. から引用。
 25. Deutsche Intellektuellen im Exil, S. 509.
 26. a. a. O., S. 510.
 27. a. a. O., S. 133. マリア・ライトナーはアブシュに、この非合法の出会いのさい、出国および国外脱出の可能性について相談している。なお、Alexander Abusch: Der Deckname. Berlin 1981, S. 569. 参照。
 28. ベルギーのレジスタンスグループの一員となったという説、親衛隊に逮捕、拉致

- され、殺害されたという説などがあるが、決め手となる物的証拠に欠けている。
29. Anna Seghers: Aufsätze, Ansprachen, Essays 1954-1979. Gesammelte Werke in Einzelnenausgaben Band XIV. 2. Auflage. Berlin und Weimar 1984, S. 303.
30. マリア・グロルムスは1934年に、38歳の時、われわれの眼前から姿を消し、ふたたびその自由になった姿を見せることはなかった。それゆえ、とくにその非合法活動時代と10年間の拘禁時代の足跡を辿ることは容易ではない。非合法活動は、言うまでもなく、活動自体がすべて秘密裏に行われるので、全体像はもちろんその一片を捉えるのも非常に困難である。ヴァルトハイム刑務所（注38参照）とラーヴェンスブリュック強制収容所（注42参照）時代については、たった一人の妹ツェツィーリアの証言、強制収容所を生き延びたかつての仲間たちによって貴重な証言がもたらされた。ゾルプの作家マリア・クバシュがそれらを丹念に集めて「Sterne über dem Abgrund. Das Leben von Maria Grollmuß. Berlin 1976.」を書いた。以下これに基づく。
31. Ruth Seydewitz: Alle Menschen haben Träume. Meine Zeit-Mein Leben. Berlin 1978, S. 160-188. この辺の事情は著者の個人的体験を通してここに詳しく書かれている。なお、同書184—191頁にはマリア・グロルムスとの交流についての記述があり、彼女を極めて高く評価している。また、個人体験を小説の形で書いた「Eva Lippold: Leben, wo gestorben wird. Berlin 1978.」の中では、収容所内の状況が描かれ、マリア・グロルムスも実名で登場している（92—107頁）。「素質と受けた深い教育がマリア・グロルムス博士に優しい忍耐力、用心深い賢明さを備えさせた」と彼女は書かれている。
32. a. a. O., S. 189.
33. この非合法雑誌のタイトルに関しては、1933年以前の「ローテ・ブラット」というカトリック社会主義者の雑誌のタイトルと殆ど同じであり、興味深くかつ啓発されるところが多い。
34. Max Seydewitz: Es hat sich gelohnt zu leben. Erkenntnisse und Bekenntnisse. Berlin 1976, S. 331-335.
35. Sterne über dem Abgrund, S. 87. なお、Die Sorben. Wissenwertes aus Vergangenheit und Gegenwart der sorbischen nationalen Minderheit. Bautzen 1979, S. 79-80. 参照。
36. a. a. O., S. 92.

37. a. a. O., S. 95. なお、ヘルマン・ラインムート博士には「国家反逆」罪で10年の禁固刑、ヴィリ・エルスナーには「政党再建法」違反で1年6ヶ月の禁固刑が下された。ラインムート博士はザクセンハウゼン強制収容所に入れられ、1942年にそこで死亡した。
38. 同時期ヴァルトハイム刑務所で過ごしたフリッツ・ゼルプマンは伝記「Alternative Bilanz Credo. Versuch einer Selbstdarstellung. Berlin 1969, S. 268-301.」の中で、そこでの非人間的な悲惨な生活条件を描いている。しかし、そのような状況下でもマリア・グロルムスは、ゼルプマン同様、反ファシズム闘争を止めることがなかった。なお、この刑務所については「Martin Habicht: Zuchthaus Waldheim 1933-1945. Berlin 1988.」に詳しく記述されている。
39. Kito Lorenc (Hrsg.): Serbska čitanka. Sorbisches Lesebuch. Leipzig 1981, S. 475. マリア・グロルムは妹への手紙でこう書いている。「暗い時代には小さくても新しい炎を灯さねばなりません。そして小さくても新しい明かりを点けなければなりません。暗い時代にも十分ではなくても明かりは灯ることが出来るでしょう。」ここでは、絶望の中でも絶えず希望という明かりを灯し続けようとする彼女の前向きな気持ちが読み取れる。なお、彼女の妹宛の手紙は1945年戦争終了時にラディボールで大部分が破棄された。
40. Sterne über dem Abgrund, S. 113.
41. a. a. O., S. 119. なお、後にラーヴェンスブリュック強制収容所でドレースデン時代の囚人仲間リタ・シュペングラー博士にこの事を語っている。
42. 女性のみを収容する強制収容所。主に各国の政治犯がヨーロッパ中から集められ、ここに入れられた。1940年には5,000人、戦争終了時には30,000人が収容されていた。囚人を対象とする人体実験、医療実験が行われた。約92,000人がこの収容所で命を落としたと言われている。「カフカの恋人」ミレナ・イエセンスカも、マリア・グロルムスと同じ頃（1944年5月17日）、ここで死んだ。47歳であった。なお、「Frauen-KZ Ravensbruck. Berlin 1971.」にこの収容所の様子が詳しく記述されている。
43. Torsten Seela: Bücher und Bibliotheken in nationalsozialistischen Konzentrationslagern. München 1992, S. 138.
44. Sterne über dem Abgrund, S. 183.
45. a. a. O., S. 136.

46. Zuchthaus Waldheim 1933-1945, S. 113. ここに同じような活動の一端がみられる。
47. Sterne über dem Abgrund, S. 182.
48. a. a. O., S. 189.
49. a. a. O., S. 197.
50. a. a. O., S. 83. から引用。
51. ヴォルフガング・ヴィッパーマン「ドイツ戦争責任論争、ドイツ「再」統一とナチズムの「過去」」(増谷英樹・他 訳)、未来社、1999年、9—10頁。

参考文献

高村 宏「ドイツ反戦・反ファシズム小説研究」、創樹社、1997年。

Wobrazki ze serbow. Marja Grólmusec 1896-1944. Budyšin 1966.

付記

この小論はすでに部分的に発表したものを加筆・修正して新たな構成の下に纏めたものである。